



2017年度グローバルコンテスト・グランプリ受賞(中学生・高校生部門)

福島県・福島県立磐城高等学校の皆さんに直撃!

ノンバーバル(セリフなし)で描いた『Open.』という作品が、2016年度KWN日本コンテストで優勝。続くグローバルコンテストでもグランプリに輝いた福島県立磐城高等学校・放送委員会の皆さん。入学時は映像制作の経験がまったくなかった彼女達が、世界一の作品を作りあげました。その制作での苦労や楽しかった点、作品に込めた思いなどを語っていただきます。



テーマはどのように決めましたか?

遠藤 初めての映像制作だったので、最初のテーマ決めからとても悩んだのですが、日常生活で身近なコミュニケーションを題材にすれば私達にも作りやすいのでは、と皆で話し合いました。

佐藤 でも、コミュニケーションといってもいろいろあるし、どんな内容にするかがなかなか決まらなくて。

坂本 そんな時に中野先生から、“捨う”という行動から考えてみたら?と助言をいただきました。

佐藤 セリフを使わず映像だけで表現したほうが深く内容が伝わる、というアドバイスももらったので、その視点で脚本を書き始めました。ノンバーバルにしたのは、海外の人達にも平等に理解してもらえる、という意図もあって。

中野先生 じつは、最初から世界大会を意識していました(笑) “目指すは

1番”がうちのモットー。結果的にグランプリを受賞しましたが、生徒達が高い目標を持ったからこそ辿り着いたと思っています。

制作の過程で苦労したことや学んだことは何ですか?

佐藤 私は脚本、編集、出演を担当しました。主人公の心が開いていく様子を、セリフを使わずにどう表現すればいいのかわからなくて、すごく難しくして……。脚本を書くのは初めてでしたし、手探りの状態でしたが、皆と相談しながら書き進めていきました。

遠藤 セリフがないので、脚本はト書きばかりになってしまうのですが、想像して絵コンテに起こしていく作業が大変でした。描いたものも、実際に撮影してみるとイメージが違ったり…。絵コンテはほんとうに苦労しました。それに、私は撮影を担当しましたが、あんなに高性能なカメラを扱うのは初めて(笑)。自分でマニュアルを見ながら、実践で覚えていった感じです。

坂本 私は撮影アシスタントや音声を担当しました。もともとドラマ制作に興味があったので、経験できて嬉しかったです。番組づくりは一人ではできないことを実感しましたし、仲間と協力することの大切さを学びました。

佐藤 今あらためて観てみると、演技がすごいんですけど、もっとこうすれば良かったと思うところが多々あります。でも、観てくれた友達に「最後のあのシーンをやってみて!」と言われてたりすると、やはりとても嬉しいです。

遠藤 あの頃は毎日KWNのことばかり考えていて、休みもなく、時間に追われて苦しかったですけど、終わって

2016年度 中学生・高校生部門 最優秀作品賞/ベスト映像賞 『Open.』

いじめを受けていた女子高生が、“捨う”という一つの行動をきっかけに、少しずつ心を開いていく様子を描いた作品。ほぼ全編ノンバーバル。

仲間とともに試行錯誤しながら、作りあげてきた過程が楽しかったです。



言葉が通じなくても伝わります。映像の力を信じてください。

みれば映像がもっと好きになりましたし、ちょっとやさっとでくじけない強い気持ちが備わったように感じています。

グローバルサミットに参加した感想は?

佐藤 今回は日本大会だったので、海外に行けなくてちょっと残念でしたが(笑)、でも、海外の子ども達と交流を持つことで日本文化を伝えることができて良かったと思います。

坂本 もっと海外の人達とコミュニケーションを取りたい、という気持ちが芽生えました。

遠藤 自分達の作品の意味が伝わるのか不安でしたが、「おもしろかったよ」と言ってもらえて嬉しかったです。

KWNの映像制作を志す子どもたちへメッセージを

佐藤 カメラも借りられることですし、映像制作に少しでも興味があるのなら、まずは気軽な気持ちで取り組んでみて

今後も映像制作を続けていきたい



佐藤理子さん

ほしいです。
遠藤 純粋に楽しんでほしいです。大変なこともあるけれど、仲間とともに一つのものを作り上げることで、自分の中にまた新たな可能性みたいなものが、見つかるんじゃないかと思えます。
坂本 映像ならば、言葉が通じなくても、世界と繋がることができます。その映像づくりのすばらしさをぜひ体験してほしいです。

中野先生 何も無いところからものづ

仲間と協力する大切さを学びました



坂本安紀さん

グローバルコンテスト・グランプリの快挙!

日本コンテストのように、世界各国で行われるKWNの大会で勝ち抜いたビデオ作品が集結し、その審査を行うのが「グローバルコンテスト」。さまざまな視点で描かれる有力作品が多数エントリーされるなかで、福島県立磐城高等学校の『open.』という作品が、2017年度のグランプリに輝いた。



くりを始め、だんだん形になっていく過程を見れたことは、彼女達にとって大きな学びになったことでしょう。この経験が彼女らの今後の人生にきっと生きてくるはず。ぜひKWNで映像制作を体験してほしいですね。

脚本担当の佐藤さんが、ストーリーの下書きをしていたノート。何度も書き換えられた跡が



映像づくりがもっと好きになりました



遠藤愛実さん

Workflow

映像作品が仕上がるまで

ある学校の具体例を紹介します!



完成!

どんなテーマで、どのような作品をつくりたいか、入念にディスカッションします。

テーマに沿った取材こそ、いい作品の命。いかに現場の声が拾えるかが、作品のクオリティに影響します。

取材をもとに、どのような映像が必要であるかを絵コンテに起こします。具体的なビジュアルをイメージ!

絵コンテをベースに実際にカメラを回します。同時にコメントも収録するのでシナリオづくりも大切です。

撮影した映像を作品に仕上げていきます。取材映像の構成の組み立てや、効果音など吟味して完成させます。